

ANTIQUE
PURCHASE SEMINAR

骨董品買取セミナー

陶器 / 磁器 編



戸塚古美術品市場

第1章 陶磁器とは

日本には有名な陶磁器がたくさんあります。

陶磁器は日常生活で使用したり、贈り物にしたりと、非常に重宝されているだけでなく、海外でも日本文化を代表するものとして古くから知られています。

そして、「陶器」を日本で初めて本格的に焼いたのが「瀬戸」であり、「磁器」を初めて作ったのが「唐津」です。

そのため、陶磁器のことを西日本では「からつもの」といい、東日本では「せともの」といいます。

陶磁器のはじまり

今から1万年以上前、食料の調理や備蓄のために土器が作られるようになりました。

土器としては、「縄文土器」や「弥生土器」が有名です。

その後に登場する「土師器^{はじき}」は、古墳時代から奈良・平安時代まで生産されていました。

また、同じ時代に、「須恵器^{すえき}」という陶質土器も存在しました。



土器



土師器



須恵器

飛鳥・奈良時代には、素焼^{うわぐすり・ゆうやく}から釉薬を使った陶器が生産されるようになります。

この時代の陶器としては、緑釉陶器^{りょくゆうとうき}や三彩陶器^{さんさいとうき}が有名です。

そして鎌倉時代には、日本各地にさまざまな窯が作られます。

それらの窯は、現在も存在しており「日本六古窯^{にほんろっこよう}」と呼ばれる由緒ある窯です。

日本六古窯 (にほんろっこよう)

古来の陶磁器窯のうち、中世から現在まで生産が続く代表的な6つの産地の総称。

越前焼 (福井県越前町) 瀬戸焼 (愛知県瀬戸市) 常滑焼 (愛知県常滑市) 信楽焼 (滋賀県甲賀市) 丹波立杭焼 (兵庫県丹波篠山市) 備前焼 (備前市)

緑釉陶器 (りょくゆうとうき)

平安時代に生産された施釉陶器で、750℃前後で溶ける金属である鉛・銅を主成分にした釉を用いており、強く鮮やかな緑色を発する。

三彩陶器 (さんさいとうき)

緑や茶や白などの多色の釉薬を施した陶器のことで、2色や4色でも一般的に三彩と呼ばれることがある。

第2章 陶器と磁器の違い

陶器

主原料に陶土を用いており、800～1,300℃で焼いたものが陶器です。

陶土を使用することから、別名「土物」^{つちもの・はにもの}と呼ぶこともあります。

「熱しにくく冷めにくい」という点が陶器の特徴です。

陶器は熱伝導率が低いため、熱い飲み物を飲む場合によく使用されています。

また、磁器に比べて吸水性が高いことも陶器の特徴のひとつですが、釉薬を施すため、水を通すことはありません。

日本の有名な陶器



しがらきやき
信楽焼



ばんごやき
萬古焼



みのやき
美濃焼



唐津焼



瀬戸焼



ましこやき
益子焼



萩焼



備前焼



たんばたちくいやき
丹波立杭焼



おんたやき
小鹿田焼

第2章 陶器と磁器の違い

陶器

安土桃山時代には、茶の湯が盛んになります。

その影響もあり、日本の陶器は独自の発展を遂げました。

また、この頃には各産地がそれぞれの色を求めるようになり、「瀬戸黒」「黄瀬戸」「志野の白」「織部の緑」のような代表例を挙げるすることができます。



瀬戸黒



黄瀬戸



志野の白



織部の緑

磁器

陶器よりもあとの江戸時代になると、磁器が日本で使われ始めます。

朝鮮一般陶工出身の陶工「李参平」^{りさんぺい}が佐賀県有田の泉山にて良質の磁器鉢を発見したことにより、有田で磁器の製造が始まります。

これが「有田焼」です。

当時はその積み出しが伊万里からなされていたので、別名「伊万里焼」とも呼ばれました。

磁器の登場によって、酒井田柿右衛門などによる色絵磁器が創始され、幕府や将軍たちへの献上品としても扱われるようになりました。

こうして色彩豊かな磁器が増え、江戸時代後半から末期にかけて日本各地に磁器の生産が広まることになりました。

色絵磁器 (いろえじき)

磁器の表面に赤・黄・緑・紫等の色絵具で文様を表現する技法。



第3章 真作(本物)と贋物(偽物)の見極め方

1 作家のサインで見極める

真作(本物)の骨董品の多くには、作品に作家のサインや烙印・刻印が残されています。

それらのサインや烙印・刻印が作家本人のものであることが確認できれば、作品も真作(本物)の可能性が高くなります。

ただし、真作(本物)の作品でも作家のサインや烙印・刻印がないものもありますので、サインや烙印・刻印がないことを理由に贋物(偽物)と判断することはできません。

また、骨董品の価値という観点から考えると、作家を表すサインや烙印・刻印がないものは価値が低い可能性が高いため、基本的にはサインや烙印・刻印の有無によって骨董品の価値を判断することが推奨されます。この場合、作品に残されたサインや烙印・刻印が間違いなく作者本人のものであることを確認することが必要です。

2 素材で見極める

骨董品の素材から贋作(偽物)であることを判断できる場合もあります。例えば、贋作(偽物)の陶磁器の多くは、安価な素材で作られています。

3 外観で見極める



徳利の内側に
釉薬がかかっていない



「古伊万里」と
わざわざ書いてある



釉薬がしわ状になっている



酒井田柿右衛門の特徴(余白を活かす絵柄)に
見られない絵柄が施されている



蛸唐草文様(たこからくさもんよう)が
一筆書きで描かれている



第4章 陶磁器の相場

陶磁器が高く買い取られる背景

1 資産価値・投資

陶磁器の中には、数十万円～数百万円で取引されるものも存在します。需要と供給のタイミングを見計らって取り引きすることによって、美術品としての価値が高まることもあります。かつては、投資目的で売買されることも多く、価値のある陶磁器が頻繁に高値で取り引きされていました。そのため、陶磁器を資産として購入する人もいます。車や家と異なり、1度購入するだけで他に維持費用が必要ないなどメリットも多く、資産家に人気の商材であることも価値を高めている理由の1つです。

2 中国人による爆買い

近年、中国人が日本に買い物に来る機会（インバウンド需要）が増えています。日本の骨董品の人気上昇や、戦時中に日本に入ってきた中国骨董品の買い戻しなど、陶磁器をはじめとする様々な骨董品を買うために来日している資産家もいます。中国人の資産家は高額で陶磁器を数多く購入するため、急激に需要が拡大します。日本の歴史的文化財の流失を危惧する声もありますが、皮肉なことに需要が拡大することによって陶磁器の価値が高まっていることもまた事実です。

3 供給量の限界

価値ある陶磁器は職人の手によって時間をかけて丁寧に作られます。現代の名工でも、一人の職人が作ることができる数には限りがあるため、需要が拡大すれば必然的に供給が追い付きません。その結果、価値ある陶磁器には高い値段が付くことになります。

第4章 陶磁器の相場

陶磁器の買取価格を決めるポイント

1 作家

陶磁器の価値を決める要素はいくつかありますが、中でも最も大切な基準の一つが「作家」です。

無名の作家の陶磁器でも芸術的価値が高い場合もありますが、著名な作家の作品ほど高値で取り引きされる可能性が高い傾向にあることは言うまでもありません。

2 時代

陶磁器は時代によって作り方が異なります。

そのため、作られた時代によって価値も変わってきます。

また、古くから使われていた陶磁器であれば独特の風合いがあり、時代や買い取り時の風合いによっても価値は変動します。

逆に言うと、保存状態が悪いと陶磁器そのものが劣化してしまい、風合いがなくなり、結果的に価値が下がる可能性もあるため、注意が必要です。

3 付属品

陶磁器には共箱や共布などの付属品がついていることがあります。

共箱や共布などの付属品は、骨董品買取において非常に重要です。

買取価格に大きく影響してきますので、査定を行う場合は、付属品の有無も必ず確認する必要があります。

第4章 陶磁器の相場

著名な作家と作品事例

徳田八十吉 (とくだ やそきち)

従来の九谷焼のように絵柄ではなく、色の配色のみで作品を仕上げているのが大きな特徴です。

色は約 70 色を使い分け、色の濃淡のみで作品を仕上げる技法「彩釉」を生み出しました。

また、多くの作家は、従来より上絵の焼成温度は 900℃前後でしたが、徳田八十吉は 1000℃前後で焼成していることも特徴の1つです。

高温で焼成ことによって、より深い色味が出た作品となっています。

作品の形状はろくろ成形で、面取成形を使い、多種多様なものがあります。紺系の色釉を中心に、絶妙な濃淡を使い分け、作品の深みを出しています。



市場取引価格
160,000 円

浅見隆三 (あさみ りゅうぞう)

独自の感性を駆使して、多様な形状の陶器を制作した浅見隆三の作品は独創的で美しいデザインが特徴です。中国の宋時代の青白磁を基調に現代的感覚を盛った独自の作風を残した一方で、晩年はマット風の白磁に特色ある線文を施したものが多く残されています。



市場取引価格
80,000 円

井上萬二 (いのうえ まんじ)

白磁の美しさを活かした造形が特徴的です。

井上萬二は、現代的で自由な造形をろくろ技術を駆使して成形し、色を対比させる掛分の技法で白磁の美しさを際立たせる作品を制作しました。

井上萬二の作品は、豪華な絵柄が特徴的な有田焼において、白磁の美しさを追求し、その新たな可能性を切り開いたことで「究極の白磁」と称されました。



市場取引価格
50,000 円

金城次郎 (きんじょう じろう)

赤土に白化粧を施し釉薬を使う「上焼」という壺屋焼で一般的な技法を使用しています。

派手な装飾は一切せず、魚や海老などのユーモラスなモチーフを多く描きました。

「魚や海老が笑っているようだ」と称される模様は、金城次郎の作品を代表する絵柄とされています。



市場取引価格
20,000 円

第4章 陶磁器の相場

買取相場の具体例

陶磁器の取り引き価格は、数千円から数千万円まで幅広い特徴があります。例えば、人間国宝である井上萬二が製作した壺は、10～30万円で取り引きされた実績があります。

また、備前窯や越前窯など陶磁器の産地として有名な場所で作られた陶磁器であれば、高い取り引き価格が付く可能性があり、古備前の陶磁器は30～70万円で取り引きされることもあります。

骨董品としての価値が極めて高い作品の場合は、取り引き価格が数千万円になることもあります。



青磁 大皿
市場取引価格
220,000 円



三代 諏訪蘇山
市場取引価格
50,000 円



染付 花入
市場取引価格
2,000,000 円



七宝 壺
市場取引価格
60,000 円



朱泥 急須
市場取引価格
50,000 円



猫 置物
市場取引価格
200,000 円



十三代 柿右衛門 花瓶
市場取引価格
80,000 円



青磁袴腰 香炉
市場取引価格
110,000 円



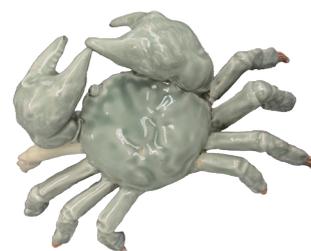
永楽 茶碗 即中斎書付 徳田正彦 三代八十吉 壺
市場取引価格
70,000 円



市場取引価格
220,000 円



藤原雄 花入
市場取引価格
14,000 円



蟹 置物
市場取引価格
50,000 円

第4章 陶磁器の相場



楽茶碗
市場取引価格
55,000 円



惺斎書付 皿
市場取引価格
80,000 円



陶器 人物像
市場取引価格
25,000 円



今泉今右衛門 煎茶道具
市場取引価格
55,000 円



染付 蓋付茶碗
市場取引価格
100,000 円



如来像
市場取引価格
28,000 円



中国 壺
市場取引価格
1,300,000 円



蕎麦茶碗
市場取引価格
50,000 円



十二代 柿右衛門 花瓶
市場取引価格
50,000 円

補足 見分け方

土

古陶器を詳しく調べる際には、必ず裏返して底の「高台」を見ます。その理由のひとつは、露出している胎土を確認するためです。産地が違って、釉やカタチは似たものが多いですが、胎土は窯場が違えば異なる特徴を持っているため、高台を見ることは産地を特定する有効な情報となります。

骨董品は古い時代に焼かれたものです。現在とは違い、昔は土のある所に窯場が築かれ、やきものの土は地元で採れるもののみを使い、他所から運ばれてくることはありませんでした。そのため、土を見れば産地を特定するヒントのひとつとなります。

- ・ 灰白色の均質の土 → 中国の磁州窯
- ・ キツネ色に焼締り黒色の繊細な点
があらわれている土 → タイのサワンカローク窯
- ・ 赤みが強く艶がない土 → 薩摩の苗代川窯
- ・ 褐色系で砂っぽく見えながら粘性
がある土 → 唐津
- ・ 淡黄味を帯びた白のやわらかい土 → 美濃

土の特徴を知るには同じタイプの作品を並べてみると分かりやすいです。

補足 見分け方

土

- ・常滑 → 粒子が粗く砂のような印象です。
淡褐色から褐色で艶は少ないです。
- ・越前 → 常滑と酷似しますがやや艶があります。
- ・渥美 → 常滑より粒子のきめが細かいです。
小石が混入していることがあります。
灰褐色をしています。
- ・信楽 → 白い長石の粒が無数にあります。
明るい発色が多く、華やかな緋色もあります。
室町時代のものまでは艶がありません。
- ・丹波 → 備前に次いできめ細かく、明るい褐色が多く、艶があります。
- ・備前 → 最もきめ細かくねっとりとした土で作られており、艶が強いです。
基本は暗褐色ですが、窯変で明るい緋色も出ます。

同じ土でも焼成方法によって外観も変わり、粒子の大きさや土に含まれている鉄分や微細な混入物が混ざって、やきものの胎土は様々に変化します。

これらをすべて覚えることは大変ですが、代表的な地域や古窯の胎土の特徴を覚えておくことで、ある程度の見当がつくようになります。

胎土によって陶磁器の形や様相、釉薬の発色も微妙に影響を受けるため、土を見極めることが、産地を確定する手掛かりとなります。

ただし、一部の地域を除き、多くの地域で、昔使われた陶土や磁土はまだその産地にあり、今もなお使用されていますので、土を見るだけではその作品が作られた「時代」を確定することはできません。

補足 見分け方

造形

1 壺の外観

時代の判定には造形技術の特徴、手法などを見分けることになります。例えば壺の場合、同じように見えるものでも「ひもづくりで巻き上げていく技法」、「ろくろで挽き上げる方法」、「型で抜く方法」があり、信楽や備前は中世までは「ひも作り」、近代以降は「ろくろ挽き」など、窯や時代によって造形方法が違います。

また、同じ「ろくろ挽き」でも、「壺の上下を別々にろくろで挽いて後で胴央を接着する胴継ぎの方法」もあれば、「ろくろで上まで引き上げる一本挽き」もあります。

中国では明代の磁器は大壺から小壺まで「胴継ぎ」でしたが、清代になるとほとんどが「一本挽き」で作られています。

これらの違いは壺の中を見ることで判断することができます。



ひもづくりで巻き上げていく技法



ろくろで挽き上げる方法



型で抜く方法

注意したいのは、単純に造形の方法で価値が決まるものではないということです。

窯の歴史や作家のネームバリューは、作品の価値に大きく影響します。ただし、手ろくろ（手びねり）であったり、薪での焼成であれば、大量生産が難しく、一品物などの希少性が高くなり、価値の高い作品となる可能性があります。

補足 見分け方

造形

2 高台

高台の場合、高台の輪を後から器本体に付ける「付け高台」と、ろくろで底部を厚く残してヘラで高台を掘り出す「掘り出し高台」があります。鎌倉時代の常滑や瀬戸の山茶碗は「付け高台」、室町時代から後は「掘り出し高台」となりました。

同じ桃山時代の茶碗でも、美濃は「付け高台」が多く、唐津は「掘り出し高台」で作られています。

3 造形の方法

時代や窯により、それぞれ一定の方法でつくられており、例外はほとんどありません。

胎土は千差万別でしたが、造形方法の種類は少なく、全く違う時代や窯でも共通点があります。

胴繫ぎは中国明代、朝鮮半島の李朝、日本では中世古窯の大壺などで見られ、型抜きは明代末の交趾、江戸時代後期の長崎平戸焼など広く見られます。

時代特有の造形方法が見られないときは、作品自体を疑ってもよいほど、造形は判定の基準として分かりやすいものでもあります。

方法は限られており、見分ける技能の習得も比較的簡単なため、基本的な造形方法は覚えることが可能です。

補足 見分け方

造形

4 様式

古陶磁の形状や装飾なども、時代や産地特有で、判定のポイントとなります。

壺、皿、鉢などの形態は種類が少なく、似たものも多いですが、厳密には産地や時代を超えて同じものはほとんどありません。

装飾、とりわけ絵付けなどの文様は、多くの種類があり、古陶器の時代や産地の判別に有効です。

明代の花文、朝鮮半島の三島の魚文、初期伊万里の松の描き方など、ほとんどの文様は、その時代や窯の特有の描法で描かれています。

陶磁器の絵付けに多く登場する龍や唐草文も、時代や産地によって少しずつ違っており、陶磁器に描かれた唐草文からも、どの時代のものかなどが分かることがあります。

これらの文様の全く同じものが後代も繰り返されることはなく、一時期同じような文様のものがどんなに多く焼かれていても、それはその時だけのものと言えます。

補足 見分け方

造形

5 古色

古色は「古びた感じ」のことで、新陶にはない独特の風格を見せる経年変化のことで、贋作が出回る際にも、この「古色」がほどこされているため、古色の見分け方も真贋判定のポイントとなります。

古陶器の経年変化のひとつは、人から人へ伝えられた「伝世品」に見られます。使用による擦れや、キズ、シミなどの汚れが付いています。もうひとつは、土中や水中に埋没した発掘品に特有の「化学的変化」によるもので、「カセ」と呼ぶ胎土や釉薬の風化、釉薬の空洞化による乱反射（銀化）などがあります。また、永年使用していた器が後世に埋没したものや、発掘した後、永く使用したものなど、複合的に経年変化したものもあります。

一般に、磁器は陶器に比べて汚れにくく、科学的にも侵されにくい特徴があり、あまり変化しません。そんな磁器でも、焼の甘いものは貫入（かんにゅう：釉のひび）に汚れが入って茶色になっていたり、染付の色がうすれて粉が吹いたようなものもあります。

同じ時代に作られたものでも、使用の頻度や使われ方、土中の化学成分などによって古色のつきかたが異なり、古色からは年代を正確に推測することはできません。また、基本的に古陶器には何らかの古色が付いていますが、未使用のまま地上で建物の中で大切に保存されたものには、古色が全くついていないものもあります。

贋作や新作には、古さを装うためにこれらの古色をわざとつけているものが多く見られます。漆を薄く塗って茶渋が付いているように見せた茶碗や、紅茶などに漬けたり、煮たりして汚したもの、器面にサンドペーパーで擦り傷をつけたもの、フッ化水素などの薬品で釉薬を浸し、発掘品のように見せたものなど、その手法はさまざまです。

それでも注意深く見ると、自然な古色とは違うことが分かります。自然な古色と人工的な古色を見分けることは大変重要ですが、それ以上に、古陶器としての本体を見極めることが判定の目を持つという意味では重要となってきます。実際、多くのケースで古く見えるものの方に贋作が多く、真作は大切に保管されていたためか、新しく見えることがあります。